

## はじめに

本稿はロシアの哲学者ニコライ・アレクサンドロヴィッチ・ベルジャーエフ(1874～1948)の思想についての研究である。ベルジャーエフは西欧においてもロシアの宗教的な伝統を受け継ぐ哲学者として高い評価を受け、ロシア的な宗教性を代表する論者であると見なされてきた。しかし、実際の彼の生い立ちを見ると、軍人貴族の家系に生まれたこともあり、ロシアの宗教的土壌から離れた家庭環境で成長している。初めベルジャーエフは陸軍の幼年学校に入学し、将来軍人として家系を継ぐことを期待されていた。だが、幼い頃から哲学に目覚めた彼は、家族の反対を押し切ってキエフ大学に入学するという道を選んでいる。そして、キエフの大学人との交流の中で本格的な哲学的思索に入っていくわけだが、当時マルクス主義者を自認する左翼的インテリゲンツィアの一人でもあった彼は、集会に参加した際に逮捕され、裁判を経て北方のヴォログダに約3年間流刑されることになり、大学も追われることになる。この間に、カウツキーの『ノイエ・ツァイト』誌にデビュー論文を發表し、思想家として出発することになるが、その後の自身の哲学的な思索の過程でキリスト教に向かい、ロシアでも希有な宗教哲学者としての位置を占めるまでになるのである。それと同時に、彼は当時の貴族出身の思想家がそうであったように、雑誌や新聞などを中心に著述活動を繰り広げ、哲学に限らず、社会評論的な分野でも発言を行っている。そして、1917年の革命によってボリシェヴィキが政権を奪取した後、一度はモスクワ大学の教授にも選任されるが、1922年に国外追放となり、最初はドイツに、そして1925年にパリに移り、亡命ロシア人の中でも数少ない成功した著述家として執筆や講演に活躍することになる。そして、1948年に74年の生涯を終えるまで祖国に戻ることはなく、客死することになるのである。

本研究の目的は、こうしたベルジャーエフの生涯全般にわたってその思想的営為を追うのではなく、ロシア時代の思想的形成に注目し、その中で、具体的にどのような問題が論じられていたのか、その射程がいかなるものであるのか、またどのように読み解くことができるのかを問うことにある。通常、ベルジャーエフの思想的な歩みはマルクス主義からイデアリズム、そして宗教哲学へという形で描かれ、それだけを見ると思想的に大きな転換があったように見えるが、必ずしもそう捉えきれない事情がある。彼は自叙伝である『自己認識』の中で、「私は生の意味を知らないかもしれないが、意味の探求はすでに生に意味を与えている。だから、私はこの意味の探求に生涯を捧げよう<sup>(1)</sup>」と哲学を志した幼い頃の決意を回想しているように、極めて実存的な問題意識から哲学に向かっているのである。従って、表面に現れるスローガンはその時々々のベルジャーエフの関心の所在を示してはいるものの、そこにどのような発想や哲学的意図が込められているのかを見極めていかないと、上滑りした議論にしかなくなってしまう恐れがある。そしてまた、彼の思想的な歩みの中で、果たして初発の問題意識は貫かれていたのかという問題についても、やはり哲学の内容から判断していく必要があると考える。それによって、彼の哲学がどのような特徴を持つものであったのかも自ずから明らかとなると思われる。

詳細な検討の方針は各章の冒頭でも触れるが、大枠として以下のようにする。全体は二部構成として、各部を二章に分け、全体で四章構成とする。まず、第一部では彼のデビュー前後から1907年頃までの時期について、雑誌論文を中心的な資料とし、認識論や倫理学、形而上学の領域において提出された問題を具体的に検討しながら、彼の哲学の基本的なモチーフやその構成について解明していくことにする。また、初期の哲学的な思索の成果である1911年の『自由の意味』と1916年の『創造の意味』について、特に前者では認識論の問題を、後者では彼の宗教哲学の一大モチーフである人間論と創造論などを中心に、それぞれ一章を設けて第二部で検討していくことにする。また、本稿では彼の社会的、政治的な分野での発言に関して、ある程度本論との兼ね合いで言及することはあるが、多岐にわたる全ての主張を拾い上げることは構成上不可能であるので避けることにする。ただし、1909年に刊行された論集『道標』に関しては、それによって引き起こされた論争がロシア思想史上の大事件とし

て取り沙汰されていることもあり、ベルジャーエフにとっての『道標』と彼の立場について、第一部の最後に補章という形でまとめることにする。

次に、こうした叙述方針をとることとの兼ね合いで既存の研究についても触れておくことにする。まず、これまでのベルジャーエフ関連著作についてであるが、彼の波乱に満ちた生涯と戦後の実存主義的な哲学潮流の流行が相俟って、伝記的な事実や人格主義として紹介された彼の哲学を概説するだけのものが少なくない。総論的、紹介的な著作としては、1948年の彼の死後、西欧やアメリカで、ベルジャーエフに関する伝記的な著作が多数出版されている。特に1950年には、M.スピнкаやG.シーヴァー<sup>2)</sup>など数点が発行されている。この時期の伝記的な著作として最も優れていると思われるものは、1960年に出版されたD.ロウリーの『反逆せる予言者—ニコライ・ベルジャーエフの生涯<sup>3)</sup>』で、ベルジャーエフと実際に交流があった著者だけにかかなり細かな資料に依拠している。だが、これらはベルジャーエフの思想を考えていく上での有益なヒントを提供してはいるものの、ここで検討するように、哲学的な思索の内実を明らかにするものではない。こうした著作全体に言えることであるが、ベルジャーエフ自身が日記を残していないことや、多くの証言が主としてパリ亡命後のもので、時期や場所、状況が不明瞭なものが多いことなどから、実証的研究と言うには少し厳しいものも多いと言わざるをえない。

ベルジャーエフ研究として提出されたものを概観すると、本論のような問題設定はまだ絶対的な数が多いとは言えない。具体的に研究の焦点を絞った研究例の初期のものとして、ドイツのB.シュルツェが1938年に出版した『ベルジャーエフの哲学—ロシアの実存主義<sup>4)</sup>』がある。これは、ベルジャーエフが存命中の研究で、晩年の著作が出る前のものであるが、彼の精神論の基礎となる「精神」という概念を詳細に検討し、そこから彼の宗教哲学を検討したものである。また、同じくドイツのR.レスラーが1956年に出版した『ベルジャーエフの世界像—実存と客体化<sup>5)</sup>』においては、「客体化」をベルジャーエフ思想の中心概念と捉え、そこからベルジャーエフ哲学を全期間にわたって後づけている。この研究では、量的にはさほどではないが、本稿で扱う初期の哲学的形成の問題に関しても、他言語に翻訳されていない初期の論文に当たった検討がなされており、初期ベルジャーエフ哲学の構成に関する研究に大きな貢献をしている。その意味で、この研究は本研究の第一部を構想する際に大いに参考となったが、取り扱う問題やそのアプローチにおいては見解を異にする部分も多い。特に、ベルジャーエフのデビューから1907年頃までの時期区分の問題に関して、レスラーはベルジャーエフの標榜したスローガンを基に三つの時期を設定しているが、本稿では表面的な思想的傾向の変化よりもその根底にある問題関心の一貫性を重視したため、第一部を二章構成としている。また、「客体化」概念の扱いについても、後期の思想において占める重要性は十分納得できるが、初期においては必ずしも同様であるとは考えられず、読解が一面的になっているような印象もある。だが、レスラーの研究は今日においても第一級の価値を持つことは確かである。ただ、残念なことにレスラーの研究の後を継ぐものはなかなか現れず、ようやく近年の再評価の中で新たな研究が現れ始めてきたが、総じてモノグラフ的な研究が多く、全面的なベルジャーエフの思想研究として取り上げられるものは未だないと言っても過言ではない。

これまでベルジャーエフの研究を困難にした最大の障害は言うまでもなく、ソヴィエト政権がベルジャーエフの思想をイデオロギー的に否定していたことに求められる。この時代には、アカデミーや大学のごく一部でイデオロギー的な研究が行われていたことを除けば、ベルジャーエフの著作は禁書状態にあり、一般に出回ることにはなかった。そのため、明らかに批判を行うための書物の中で哲学的な研究が行われていたにすぎない。無論、それらがすべて全く価値がないというわけではなく、クパーキンなどの研究書にはそれなりに的確な読解の後が見られる。しかし、そうした例外的な事例を除けば、ロシア本国において実証的な研究のための体制が整わなかったことは事実である。そのため、西側での研究にも大きな資料的制約が伴っていたのである。そして、ペレストロイカ政策以降、彼の

代表的な著作のリプリント版が出回るようになり、ようやく本格的な思想的雪解けが始まったと言える。その中では、ヴァジーモフ<sup>6)</sup>によって彼自らが収集した未発表の書簡など膨大な資料を基にもとのされた伝記が注目に値するが、刊行直後の彼の不運の死が伝えられるなど、今後の研究の行方は依然不透明である。特に、財政的な問題によって、アルヒーフ資料が未だ未整理で利用できないという状態が続くなど研究環境の改善は遅々として進まないといった状況である。その一方で、20世紀初頭の思想研究は、これらのリプリントや公開された雑誌類などを活用したものが現れ始め、スミルノフによるトゥガン＝パラノフスキー、ブルガーコフ、そしてベルジャーエフという「マルクス主義からイデアリズムへ」移行した思想家の比較研究などが出版されている<sup>7)</sup>。これは、ベルジャーエフの思想形成に関する言及は多くはないが、比較思想研究として興味深い事例である。

アメリカやカナダでの研究は比較的歴史が浅く、『道標』研究がポルトラツキーなどの亡命ロシア人によって1950年代後半から行われており、ロシア文化史を中心的な関心としたJ. ブルックスなどの論文<sup>8)</sup>がある。また、様々な思想家のニーチェ受容を中心テーマとしたA. レイン<sup>9)</sup>の研究などもあるが、ベルジャーエフの個別研究はM. ドノヴァン<sup>10)</sup>やF. ヌチョ<sup>11)</sup>など一部のものを除くとあまり例がないようである。特に、亡命以前の著作や論文を用いた研究そのものが、まだ数の上で十分とは言えない。

一方、日本へのベルジャーエフの紹介は比較的早く、戦前にすでに数多くの訳業が行われ、上述のシュルツェ論文なども戦中に翻訳されている。宮崎信彦や菅田吉などによるキリスト教思想としての紹介<sup>12)</sup>は現在でも十分に読む価値がある。また、戦後の昭和20年代から30年代にかけては、実存主義哲学の一つとして研究が行われ、白水社によって著作集も刊行されたが、40年代以降は研究自体が低調で、田口貞夫や石塚経雄などの紹介や研究<sup>13)</sup>が見られる程度である。全体としてみると、日本でも日本語への翻訳や紹介、研究のほとんどが英仏独語などの訳書を介して行われており、ロシア文化やロシア史全体との関連という点では、多くの誤解や不備があったことは否めない。ロシア語原文に依拠した研究は、青山太郎による紹介的な文章<sup>14)</sup>や、根村亮によるストルーヴェとの比較研究<sup>15)</sup>などがあるが、共に1910年以降には触れていない。ロシア語からの翻訳も、最近の青山太郎らによる訳業<sup>16)</sup>などでようやくなされ始めたばかりである。

さて、既存の研究の概要は以上のようなものであるが、西欧哲学研究との比較という点から見た場合、ベルジャーエフの思想には東方正教の独自の解釈が含まれているということが読解の障害になりうるという問題もある。上述したような彼の生い立ちからすれば、一般にキリスト教的な感覚の希薄な日本でもそれなりに理解可能な哲学者であり、ロシアの宗教的な哲学を生み出す土壌について知る上でも有益なヒントを提供していると考えられる。だが、キリスト教の内実にまで入り込んだ理解という点から考えたとき、やはり東方正教とは無縁な西欧の基準でこれを解釈することはそう簡単ではないと言える。日本での研究においても、カトリックやプロテスタントの教義理解に影響された読解によって、ベルジャーエフの主張の真意が汲み取られていないのではないかという文章に出会うことも少なくない。また、西欧での研究においては、歴史的に東西教会の関係が芳しくなかった時期もあり、東方正教に対する偏見も全くないとは言えないものもある。

さらに、西欧の同時代的状況から見た場合でも、誤解されやすい要素は極めて多かったと言わなければならない。彼の実存主義が、戦後の実存主義の立場と同一視されたり、彼独自の共産主義批判がイデオロギー対立の中で単純化されやすい状況にあったことは否めない。彼の自由主義が単に反共産主義的な意味での自由主義でないことは多くの論者が強調していることであるが、その真意がどのようなものであったかが明確にされなければ、広い理解は得られないであろう。こうした意味で、キリスト教の様々な立場からベルジャーエフ思想の全体的な把握が多く試みられる必要があったことは事実であるが、その際に西欧語の訳書が多く、また思想書としてある程度まとまっていた後年の著作が用いられたため、初期に関しては研究が全く手薄になってしまったと考えられる。また、こうした流

れから、実存主義やキリスト教の理解の仕方という問題について示唆するものは多いが、シュルツェやレスラーのような細かい概念の分析にまで及んでいないため、ベルジャーエフの哲学そのものが哲学的思索としての価値を真に有するものであるかということにさえも疑問が呈されることも少なくない。そうした意味でも、初期からの具体的な思索の内実を検討する作業が改めて要求されているのである。

1922年に国外追放の憂き目にあったベルジャーエフがロシアで思索した期間は、1900年のデビューから数えても22年間であり、亡命先のパリで亡くなるまでの25年に匹敵する期間である。無論、思索者にとって自らの思想を確立するまでの期間の方が単純に年数に換算することのできない重要性を持っていることは疑いようがない。研究環境として厳しい状況が長く続いてはいるが、革命以前の時期の書簡や手稿類などがわずかづつではあるが、整理・公開されはじめていることも確かであり、ベルジャーエフの思想形成の過程を具体的に研究する可能性は徐々に開かれてきている。同時に、いわゆるロシア・ルネサンスと呼ばれる20世紀初頭の文化的潮流の周辺にいた思想家、哲学者の業績も見直され始めており、当時の思想的状況をこれまで以上に勘案する必要も出てきている。特に、これまでの思想史において必ずしも正面から扱われなかった宗教哲学や大学人の哲学研究が、西側のそれに劣らない価値を持っていた可能性に研究者が目を向けはじめている。残念ながら、日本ではまだごく一部の研究者によってしかこうした関心は抱かれていないが、ロシア哲学の可能性は意外なほど大きかったかもしれないのである。そうした観点から、彼の哲学における具体的問題を詳細に検討する試みもデュヴァルらによってなされるようになり、ヨーロッパ哲学との密接な関わりの中で捉え直すことも求められ始めている。本稿では、こうした背景を踏まえ、ベルジャーエフの哲学的な問題意識の基本構造を具体的に検討しながら、ベルジャーエフを通してロシアの宗教的な精神性から見た西欧の近代的な精神性とは何かという問題についても目を向けていきたいと思う。それによって、今現在我々が何を思索することができるのかという問題を考える道筋も得られるように思われるからである。

最後に、時代背景について予め触れておくことにしたい。第一章でも多少言及するが、ベルジャーエフが著述活動を開始した時期のロシアの哲学的状況は、同時代の西欧と比較した場合、明らかに様々な面で多くの制約を負っていた。特に、19世紀半ば以降に激化した革命運動を恐れるあまり、大学での哲学講義が長年にわたって禁止されるなど、常に政治的な闘争の渦中に哲学的思索も囲い込まれていたのである。今日の我々からすれば、哲学研究は一見世間から離れた活動とも思われがちであるが、当時のロシアでは哲学がイデオロギー宣伝に利用されることが極度に恐れられていたため、思想的に極めて不自由な状況を作り出していたのである。そのため、革命的知識人からすれば、大学で曲がりなりにも哲学的な問題を論ずることを許された大学哲学者は、革命によって否定されるべき権力に従順な人間であるかのように見なされたのである。今日再評価が進みつつある19世紀の大学哲学者(ユルケーヴィッチ、コズロフ、ヴヴェジェンスキーなど)は、ロシア哲学の一翼を確実に担うような独自の思索を行っていたにも関わらず、革命的知識人からは無視され続けたのである。そうした偏った見方は、著述活動を開始したばかりのベルジャーエフにも見られたものであり、当初大学外で活動した反体制的著述家の多くに共通した精神性を形作っていたと考えられる。そのため、自らマルクス主義者を自称し、カウツキーの『ノイエ・ツァイト』にデビュー論文を発表したベルジャーエフがイデアリズムへ移行したことに對して轟々たる非難が巻き起こったのも状況としては頷けるのである。だがしかし、それによってベルジャーエフが反動思想家になったと捉える当時の左翼知識人の見方は、彼らが思想の内実よりも表面的主張のみを見ていたことをも明らかにしている。言わば、二重の意味で思想的に極めて不自由な時代状況の中でベルジャーエフは思索を遂行していたのである。

そうした時、ロシアには哲学が果たして存在するのかという問題は、今尚古くて新しい問題であると言わざるをえない。また、その内実について考える前に、その歴史的な道程がどのように省みられるかによって、回答が二つに分かれることを指摘しておくべきであろう。ソヴィエト政権期に喧伝さ

れたマルクス・レーニン主義的な、極めて政治色の強い、また思想史的に見ても極めて単純化されて継承されたとはいえない唯物論哲学のみをロシアの哲学的思索の歴史的な最終地点と捉える見方に与すれば、そこにギリシア哲学以来のヨーロッパ哲学の歴史はきわめて限定された形でしか輸入されることがなかったと断ずることもできるであろう。18世紀以来、ロシアはフランス啓蒙主義やドイツ観念論、そしてマルクス主義と、ヨーロッパの時代の主流をなした哲学を学び、20世紀初頭にはいわゆる「ロシア・ルネサンス」と呼ばれるような、思想的にも、また広く文化的に豊穡な時代を経験もした。だが、結局のところ抑圧的な共産党体制によって、哲学の領域にさえも政治闘争が持ち込まれた結果、真剣に考慮するに値しない哲学の不毛の時代を招来し、ペレストロイカによって過去の言説の持つ意味を改めて吟味しなければならないような歴史を辿った。これがその回答の一例であろう。亡命ロシア知識人を多く受け入れたフランスなどでは、80年代にはこうした見方が一つの典型をなしていたのである<sup>(17)</sup>。

今日に至るまでロシア思想史が主として19世紀を中心に語られてきたのは、こうした歴史的背景があるからだと言っても過言ではない。無論、19世紀以来のロシアの思想的営為の内に20世紀初頭の開花を導く多くの要素があったことは確かであり、そこにはヨーロッパの哲学、特にフランスやドイツ、イギリスなどの哲学とは趣を異にする極めて独創的な哲学の営みも見いだされる。それがA.C.ホミャコフ(1804-1860)やBr.ソロヴィヨフ(1853-1900)に代表される正教的な宗教哲学の流れである。近年ではロシアにおいてもこうした哲学的営為が再評価されてきつつあるが、ロシア哲学と西欧哲学の連関を問う作業はまださほど多くはない。その一因として、西欧の哲学史的な視点から見た場合、ホミャコフやソロヴィヨフの思想は宗教哲学として分類されざるをえず、広い意味でのヨーロッパ哲学全体からすれば傍流に位置する特異な現象なのではないかという印象を持たれがちであることが挙げられよう。だが、内実をよく検討していけば、それらが決してギリシア以来の哲学の伝統から断絶したものではないことが分かる。中世以来の東西教会の対立によって、西欧が受容したような哲学的伝統からロシアが長い間断絶されてきたことは確かだが、その一方で西方教会よりもはるかに神秘的な性格の強い東方教会の影響を受けたという歴史的状況から独自の精神性が函養され、18世紀に西欧の文物が大量に輸入されるようになった時にも、そうした精神性を反映する哲学が生み出されたのである。

西欧哲学が消化吸収されるに従い、その問題意識が共有されると同時に、異なる精神的志向性を体現した西欧哲学の問題意識の根底にある、通常は意識されることのない傾向に対する敏感な反応もあったと言えよう。Ф. M. ドストエフスキー(1821-1881)の西欧に対するアンビヴァレントな発言も、そうしたロシア思想を取り巻く状況が招来した二重性を背景にしているように思われる。その意味で、ロシアにとっての西方は本来的に西方的であるにも関わらず、全人類的な普遍的な何物かへと鍛造された世界として、東方にとって疎遠であると同時にまた理解可能な世界として映っていたのではないだろうか。このことは西方や、あるいはその近代的な観念や諸制度を輸入し、民主主義という普遍的な価値を共有しつつある我々にとっても、ロシアが極めてロシア的な、我々の理解からは遠い何かから出発しているにも関わらず、ある部分では理解可能な普遍的思考によって編み上げられた世界として現れていることを同じように説明する方途を示しているように思われる。

従って、今日のロシアの哲学的な営為について研究していく際にも、初めからそれが何か特殊な思惟の働きによって生み出されたもの、全く理解不能なものではないかという先入観を持つ必要はないと言える。当然、表面的に西欧の哲学と異なる部分が目に付く以上、それがいかなる差違であるのかを考えることに重大な意味はある。だが、一つの見方として、ギリシア哲学とキリスト教神学がヨーロッパの哲学思想の源泉であるとすれば、それは西欧にとってもロシアにとっても共通の伝統であり、大枠では問題意識もそこから汲み取られていると言ってよい。西欧で近代哲学が成立していく過程で、源泉の一方であるキリスト教神学が前景から退いていったとすれば、ロシアにおいてはそれがソヴィ

エト政権による宗教弾圧がキリスト教的な伝統を破壊するまで哲学的源泉の一つとして維持されたことに相違がある。

これは、ロシア哲学における「世界観(миросозерцание, мировоззрение)」の探求というモチーフに最も明瞭に示されている。ドストエフスキーの小説『カラマーゾフの兄弟』に登場する次兄イヴァンは「墓場」となったヨーロッパに対する憧れとも哀れみともつかない言葉を語っているが、ニーチェによって「神の死」の宣告された世界、もはや天上が遥か彼方へ消え去った世界がそこにはある。当時のロシア人も無神論的なイデオロギーが喧伝される状況の中で、神が果たして本当に彼らを見守っているのか、徐々に懐疑的な感覚を持ち始めていたと言えよう。それでも、まだ神は彼らにとって極めて近く、素朴であるとは言え、自然な実感を伴うものだったのである。彼らの中で交錯する神無きヨーロッパと神の臨在するロシアのイメージは、世界像の違いとして感得されていたように思われる。

その最も端的な例として、B.B. ゼンコフスキー(1881-1962)は、その著『ロシア哲学史』において、ロシア哲学の特徴を捉えて、それが神中心主義でも、宇宙中心主義でもなく、人間中心主義であったと語っている<sup>(1)</sup>。この三つのものは人間と神と、そのそれぞれがいる天上と地上の世界を対比したところからしか出てこない見方である。司祭であった著者の立場が反映されているとは言え、そうした神のいる世界の風景が多くの過去の哲学にとって自然なものであったと考えても間違いではなからう。ロシアの哲学者や思想家たちの多くは、20世紀に入ってからでもそうしたキリスト教的な感覚を保持していたのである。無論、西欧でそうした傾向が全く消え去っていたとは言えないが、日常的な感覚としてキリスト教との関係が疎遠になる中で、キリスト教と哲学の間に深い断絶があるかのような感覚が実体化していったことは否めないであろう。

ベルジャーエフの哲学もロシアの宗教哲学であり、表面的には我々の理解に馴染まない部分もあるが、読み進めていく内に、我々自身が今日の世界において問題として取り上げなければならない多くの事柄を捉える「別な観点」がそこにあることに気付かされるのである。それが、多少なりとも我々自身の思考にも何らかの示唆を与えうるものだとすれば、その内実に分け入ってみたときに、これまで我々には知られることのなかった展望が開けてくるようにも思われる。

(1) Бердяев Н. А., Самопознание. Опыт философской автобиографии. Собрание сочинение. том 1. YMCA-Press Paris 1989. стр. 94. (『自己認識』、СОфа.)

(2) Spinka M., Nicolai Berdyaev. A captive of freedom. Philadelphia 1950.

Seaver G., Nicolai Berdyaev. An introduction to his thought. N.Y. 1950.

(3) Lowrie D., Rebellious prophet. A life of Nikolai Berdyaev. N.Y. 1960.

(4) Schultze B. S. J., Die Schau der Kirche bei Nikolai Berdjajew. Roma 1938.

(『ベルジャーエフの哲学—ロシア的実存主義』霜山徳爾訳、理想社、1951年。)

(5) Rossler, R., Das Weltbild Nikolai Berdjajews. Existenz und Objektivation. Gottingen 1956.

(『ベルジャーエフの世界像—実存と客体化』松口春美訳、大盛堂書房、1981年。)

(6) Вадимов А., Жизнь Бердяева. Россия. Oakland 1993.

(7) Смирнов И. П., От марксизма к идеализму, М. И. Туган-Барановский, С. Н. Булгаков, Н. А. Бердяев. М. 1995.

(8) Brooks J., "Vekhi and the Vekhi Dispute." *Survey*, vol.19, No.1, 1973. pp. 21-50.

(9) Lane A. M., Nietzsche in Russian Thought 1890-1917. The University of Wisconsin- Madison, Ph.D., 1976.

- (10) Donovan M., *The Role of Russian Religious Thought in the Writings of Nicolai Aleksandrovich Berdyaev, 1874-1948*. The University of Wisconsin, Ph.D., 1960.
- (11) Nucho F., *Berdyaev's philosophy. The existential paradox of freedom and necessity*. London 1962.
- (12) 宮崎信彦『ベルジャエフ』弘文堂、アテネ文庫、1949年。  
菅円吉『ベルジャエフ』日本基督教団出版部、1966年。
- (13) 田口貞夫『ベルジャエフ—生涯と思想』創文社、1961年。  
石塚経雄『ベルジャーエフ研究』明玄書房、1974年。
- (14) 青山太郎「国家・革命・教会—ベルジャーエフのロシヤ・インテリゲンツィヤ批判」『思想』、1977年、632号、187-206頁。
- (15) 根村亮「ベルジャーエフとストルーヴェ1901-1910」『スラブ研究』、1991年、36号、129-151頁。
- (16) 行路社版ベルジャーエフ著作集のこと。現在まで二巻が刊行。  
第四巻『創造の意味』青山太郎訳、行路社、1990年。  
第八巻『共産主義とキリスト教』峠尚武訳、行路社、1991年。
- (17) 例えば、最近邦訳の出たザパタなどがその一例である。しかし、ザパタのソヴィエト哲学史に関する記述はベルジャーエフの20年代の批評を下敷きにしたと思われるようなものが多く、簡略なものにとどまっている。  
Zapata R., *La Philosophie Russe et Soviétique*. Collection QUE SAIS-JE? No 2412. 1985.  
(『ロシア・ソヴィエト哲学史』原田佳彦訳、白水社文庫クセジュ、1997年。)
- (18) Зеньковский В. В., *История русской философии*. Л. 1991 т. 1 ч. 1 стр. 16. (впервые Paris 1948.)